



特定非営利活動法人 **アイユゴー通信 第 27 号**

〒590-0432 大阪府泉南郡熊取町山の手台 1-22-10

TEL / FAX: 072-452-5680

e-mail : [snittaskmj0715@yahoo.co.jp](mailto:snittaskmj0715@yahoo.co.jp)

homepage : <http://aiyugo.org/> (改定中)

目 次

日越合同セミナー特集

- 1) 活動報告
- 2) 再会：ベトナムから来日
- 3) セミナーを通して ～参加者からのメッセージ～



第 6 回 医療と保健・福祉に関する合同セミナー

特定非営利活動法人アイユゴー顧問

医療法人社団慈恵会神戸総合医療専門学校校長

神戸大学名誉教授

三木 明德



ダラットの少数民族の歓迎の儀式  
"Hello, Da Lat"(左：三木先生)

アイユゴーの活動にご理解とご支援をいただき感謝いたします。平成 29 年の夏、「医療と福祉に関する日越合同セミナー」がベトナムのダラット市で開催されました。このセミナーには近畿大学の学生 3 名、徳島大学の学生 1 名、神戸大学の学生 2 名と卒業生 1 名、引率者 2 名、ホーチミン大学の学生と教員 5 名、ダラット大学の学生と教員 6 名が参加し、

ベトナムの少数民族地域における人々の生活や医療・福祉の現状を知るとともに、ベトナムの若者や少数民族の人々との親密な交流を通して、ベトナムの素晴らしさを身体全体で感じることができました。今回も三菱 UFJ 国際財団のご支援を頂きました。心より感謝いたします。

日越合同セミナーの活動報告、帰国後の参加者の活動、さらには参加者の感想や気づき、意見を参加者主体にて紹介させていただきます。

1) 日越合同セミナー活動報告

日越合同セミナー2017 (ダラット) 概要

ベトナムのダラットにて、ベトナム国立大学ホーチミン医学部やダラット大学社会福祉学部の学生と共に、現地での少数民族調査や医療福祉施設訪問を含めたセミナーを行い、直接現状を認識し、少数民族のための医療福祉センター建設に向けた考察を行うとともに、国際交流を通じてグローバルマインドやリーダーシップについて学びまし

た。



《日・越医療福祉に関する合同セミナー スケジュール表》

期間：2017年8月22日～8月27日

場所：ホーチミン市・ダラット市

日程	会場・活動	第 4 日	少数民族医療福祉センター訪問
第 1 日	ホーチミン →ダラット移動	第 5 日	日越学生の報告会
第 2 日	少数民族地区訪問	第 6 日	ホーチミン
第 3 日	伝統医療病院訪問	第 7 日	ホーチミン→関空

事前研修 (2017年7月30日/8月2日)

参加者の事前の交友を深めるとともに、セミナーの事前準備を行いました。医学部、歯学部、総合社会学部の学生と専攻分野が多岐に渡るため、2017.8.23 集合写真 (Dam Rong 地区 村役場) ナム人学生への日本の医療福祉紹介となるように意見交換をし、参加者の各々が得意分野を発揮できるような調査内容や紹介内容に決めました。

現地施設；セミナー (2017年8月22日～28日)

1 日目はダラットへ移動。ホーチミンで合流したベトナム国立大学ホーチミン医学部の学生との長い移動時間 (約 8 時間) での交流を通じ、自己紹介を超えた交友を深めました。英語が共通言語でした。

2 日目はダラット大学社会福祉学部の学生とも合流し、少数民族地区の Dam Rong 地区を訪問し、同地区の首長から現状や医療福祉センター建設計画の説明を受けました。その後、同地区の貧しい生活共同

体での調査を実施しました。調査体験を通して、調査結果だけでなく、少数民族の方々と直接コミュニケーションをとることで現状を把握する大切な手がかりが得られたことは大きな収穫でした。



2017. 8. 23 Dam Rong 地区 村長さんのお話

3 日目は Traditional Medicine Hospital を訪問し、西洋医学と伝統医学の融合、伝統医学の現代への応用を教えてくださいました。

ダラットでの医療のひとつの在り方として参考になりました。その後、Children's Village を訪問し、代表者からのお話を伺い、施設を見学しました。ベトナムでの児童施設の必要性へ目が向けられることが増えた現状を把握し、実際に子供たちと折り紙やスポーツ等を通じて交流しました。さらにダラット大学の学生に校内を案内して頂きました。



2017. 8. 24 ダラット大学

4 日目は少数民族医療福祉センターの Lac Duong Healthcare Center を訪問しました。センター長から現状の説明や、病院内の案内をして頂きました。Dam Rong 地区の医療福祉センター建設の問題把握や具体的な参考になりました。その後、ベトナム人学生と複数グループに分かれて意見交換とまとめを行い、発表用パワーポイントを作成しました。夜には、少数民族の舞踏を見学、体験しました。

5 日目には、まず日本人とベトナム人学生合同のグループごとにまとめた内容を発表し、その後、日本人学生は、日本で準備してきた日本の医療や福祉に関する紹介を行いました。

6 日目はホーチミンにて、地方都市ダラットと大都市ホーチミンの違いを体験しました。そして、深夜に帰国の途につきました。

### 事後研修 (2017 年 11 月 5 日)

セミナーへの医療福祉センター建設に対する意見、アンケート調査やセミナー全体に対する感想や気づきの共有、次回のセミナーに向けた提案をしました。



2017. 11. 5 事後研修

## 2) 再会：ベトナムから来日

今回の医療と福祉に関する合同セミナーは、いっそう確固たるつながりと今後へのさらなる飛躍を期待できるセミナーとなりました。2016 年度から参加のベトナム国立ホーチミン大学医学部の Kha To さんが 2017 年 9 月に近畿大学医学部へ研修のため来日。2016 年度のセミナー以降のシンポジウム等の活動が実を結んだ結果となりました。来日中、アイユゴーにおいて滞在の手伝いを行い、2016 年度参加者の後藤華さんによる渡航準備の手伝い、2016/2017 年度参加者の加藤正寛さんや 2017 年参加者の草場傑さんによる大学での受け入れ準備や

休日の観光や余興活動、2017 年度参加の宮城雄一さんによる休日の観光や余興活動を行いました。その結果、大きな問題なく研修生活を送り、さらに休日にセミナー参加者との再会のための歓迎会、大阪観光、



さらには淡路島や京都、広島観光へと記憶に残る充実した日々を送れたと考えております。継続した我々の草の根活動がひとつ実を結ん

だものと考えております。今後もこのような参加者を含めた草の根活動を続けていきたいと思っております。

## 3) セミナーを通じて

### ～参加者からのメッセージ～

参加者がセミナーへ通じて感じたこと、考えたことを各個人の専門性や属性を活かして紹介いたします。

#### 『アンケート調査について』

則岡 紗玖里

高齢者福祉の観点から質問項目（例えば、デイサービス施設やケアのためのシステムはあるか、どのくらい認知症の方がその地区にいるかなど）を考えアンケート調査に臨みました。調査中は通訳をお願いしたダラット大学の学生に自分の英語が通じているかが常に不安で、それがさらにベトナム語に訳され現地の方が正しく理解されているかは不確かな状態でした。質問事項の中には、現地には存在しないもの、もしくはそもそもその概念が浸透していない（デイサービスや認知症など）ものが含まれており、理解するも何も得体の知らないものなので答えようがないといった具合で回答としては満足な結果とは言えませんでした。それを打開しようと、その場で即席でいくつか質問を考えて聞くこともありました（介護が必要になったら誰に世話をしてもらいたいかなど）。全体的に回答が少なかったけれど、いくつかは今後の診療所などの施設設立時に役立つような回答もありました。それは家の構造の問題や介護知識不足から介護が不安であるといったことや、高齢者の介護はその人のパーソナリティや気分を理解しなければならないといった介護ならではの悩みを現地の人々は少なからず持っているという回答でした。また欲しい施設やシステムは何かという質問に子供から大人までかかれるヘルスセンターやかかりつけ医が近くにあるという回答がたくさんありました。



今回の経験よりアンケートの質問内容としては、現地にはないものや

概念は現地の方々がかかるような言葉で説明する必要があることがわかり、高齢者だけに限らず、村の皆が定期的な健康診査を受けられる



2017. 8. 23 少数民族調査

ようにしてほしいという強い思いを持っていることが分かりました。

『児童養護施設のあり方』

宮田 珠緒



今回、SOS Children's Village という児童養護施設へお邪魔し、お話を伺いました。今まで、数カ国の児童養護施設へと訪れたことがあったのですが、私の知っている施設とは、全く違う、新しい形の施設を知ることが出来ました。名前に "Village" とあるように、中は、1つの村として確立されていました。施設内に何件も家があり、一軒につき1人の母親と8~10人位の子どもたちが共に生活を送っています。また、子どもたちは18歳になるまで、そこで暮らしており、学校にも通っています。また、医者や歯医者も敷地内にいるため、もし、子どもたちが病気や怪我をした際でも、家へ訪れ、診断してもらうことが出来ます。今まで見たことのある児童養護施設では、男女、年齢等に分か



2017. 8. 24 SOS Children's Village

れて寮生活を送っており、その施設のスタッフさんとともに暮らしていた為、新鮮で、面白い仕組みだな、と思いました。私は、実母ではなくとも、お母さんという存在が、子供にとって大切だと

考えている為、その施設のあり方がこれから、他で広まっても良いのでは、と感じました。

『ダラット周辺の医療施設と医療福祉センター建設』

加藤 正寛



ダラット周辺の Traditional Medicine Hospital や Lac Duong Healthcare center を見学し、Dam Rong 地区での医療福祉センター建設に役立てるという視点でこれらの施設見学を振り返りました。

Traditional Medicine Hospital では、生薬の栽培場所や抽出機があり、自前で漢方の抽出液を作れることを確認しました。日本では、医療制度の成り立ちからか、西洋医学が苦手とするところのみを伝統医学が補う印象が強い一方、ベトナムでは伝統医学が西洋医学と比較的補完しあっており、伝統医学の良さを活かしていく姿勢に驚きました。さらに、Dam Rong 地区での調査の結果、伝統医学が効くと答えた人が16名中8名(他、どちらでもないが5名)、身近と答えた人が13名中6名(他、どちらでもないが2名)、安いと答えた人が13名中8名であり、伝統医学へネガティブな印象を持つ人よりもポジティブな印象を持つ人が多いと考えられ、医療福祉センターへ伝統医学を取り



2017. 8. 25 Lac Duong Healthcare center

入れることが理想であると思いました。

さらに、Lac Duong Healthcare center を見学し、財政面や場所の問題から医療者を確保することが難しく、医療機器や医療

機器を使える人を確保することの難しさを感じました。医療の質や受け入れ限界だけでなく、食事提供といった入院環境の確保の難しさか

ら、患者数も少なく感じました。そのため、Dam Rong 地区で医療福祉センターを建設する際には、ダラットの病院や別の村の診療所へ行く時間と労力の低減を目的に、定期健診や簡単な治療、大きな病院への通院の必要性の判断、ワクチン接種を行うような診療所を建設し、曜日ごとにいろいろな医療者を診療所へ誘致することが最良と考えました。

現地で調査をし、現場を肌で感じ、ベトナム人学生と一緒に同じテーマを考えながら、お互いを尊重しあえるようなとても良い機会に恵まれたことに感謝でいっぱいです。

『プレゼンから学んだこと』

宮城 雄一



私はダラット大学の学生と共にベトナムの医療について意見交換を行い、その内容をプレゼンテーションにまとめました。準備の間中、私が調査時に気づけなかったことなどを、ダラット大学の学生が分かりやすく説明してくれ、彼らの問題意識の高さやその表現力に大変驚かされました。

また、案の定大失敗に終わった私のプレゼンテーションですが、英語が苦手なのだから Power Point に内容を詰め込むことで伝わりやすく工夫するなど、次回への課題を与えてくれる良い思い出にもなりました。



2017. 8. 26 プレゼンテーション

自身の英語力の無さのため、心細くも恥ずかしくもある6日間でしたが、次こそは気持ちを通じ合わせたい!と思える仲間に出会えたとても

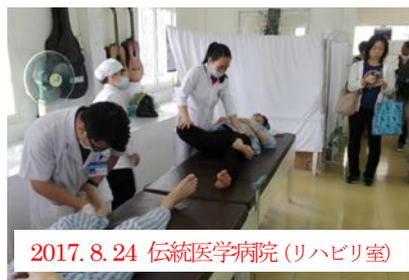
すばらしい6日間でした。

『「リハビリテーション」って知ってますか?』

篠 実希



私は理学療法士なので、ベトナムではどんなリハビリテーションが行われているのか、非常に興味がありました。しかし、初日で訪れた Dam Rong 地区での様子を伺い、気づかされたことがありました。ベトナムの山岳地域では「生きるか死ぬか」の生活であり、今一番必要なのは医師と看護師で、続いて薬剤師。歯科医や理学療法士はこの次かもしれない、ということです。



2017. 8. 24 伝統医学病院(リハビリ室)

よくよく自分の仕事が医療のどの場面に出てくるかと考えた時に、交通事故や脳梗塞で倒れるなどして救急車で運ばれ、病院で手当てを受け、一命を取り留めたなら、ようやく登場です。

糖尿病もがんも脳梗塞も元はといえば生活習慣病、つまり贅沢病が発端となって起こってくる病気です。理学療法士が地域の人に根付くのはもう少し先かなあ、としみじみ思いました。しかし、ここにヘルス

ケアセンターが建設されるなら、ぜひ理学療法士を配置してもらい、「病気の予防」という観点で役に立てると思います。センターを訪れた人に対し、農作業で腰痛・体が痛いなら全身の体操・ストレッチの指導、腕を骨折したらその後の日常生活の送り方を指導し、その後こちらから各家庭を訪問する、という流れになると地域保健・地域リハビリが根付き、地域の健康に貢献できると思うのです。

### 『歯学部生として見てきたベトナム』

松倉 春奈



ベトナム研修に参加する学生としては初めて、歯学部生として参加させて頂きました。まず行ってみたいと思ったことは、百聞は一見に如かずということでした。研修中に訪れたヘルスケアセンターでは、歯科の診療・治療室を行っている場所を見学させて頂き、ベトナムの学生さんに助けを借りてお話まで聞かせて頂きました。その話によると、このヘルスセンターにはただ一つの治療室しかなく、治療もほぼ高齢者が対象で、主な治療は抜歯なんだそうです。まずは生きるか死ぬかという社会の中で、命の安全性が第一で、医者が不足していて、設備が不十分で、といった背景においては歯科が二次にされるのは仕方ないことではありますが、そのときは聞いて驚きました。



2017.8.24 伝統医学病院 (歯科室)

この状態をすぐに日本の水準と同じにするのは不可能だと思います。Dam Rong 地区では事前に練ってきたアンケートを使って、もし新しいヘルスセンターを作るなら、歯科医師どんな治療を求めるかを伺いましたが、歯医者に

行ったことがない人も沢山いて、わからない、特になんかという意見しかありませんでした。また、ヘルスセンターのタイル張りのお風呂場のような場所では、レントゲンのタンク現像をしており、医師が「歯のあたりはあまり細かく映らないんです」と言っていました。この設備を見て私は口を押さえて驚くくらいこんな病院があつていいのかと思いましたが、ベトナムの学生の人は綺麗だね、設備もいい感じだし。と言っているのを聞いてさらに仰天しました。

単刀直入に言うと、ベトナム国内だけではこの状況を打開できないように思います。なんとかするには、もっと強い、いろんな意味での力が必要です。だから、世界中で力を持っている人に一度でもいいからこの地に立ってこの国の現状を知って、この国について考えてみて欲しいと思いました。日本とは、世界の先進国とは、社会的背景が違うためただ資金とモノの援助をするだけでは何の解決にもならない。私はまだ何の力もありませんが、将来は力を持った人たちと、この状況を良くしたいというベトナムの人たちのために、できることをしたいと思うようになった研修でした。

### 『ベトナム人学生との交流を通して、自分に与えた影響』

草場 傑

私は今回初めて海外に渡り、その国の方々と行動を共にしました。一週間の彼らとの生活の中で日本にいただけでは考えることさえなかったことが多



くありました。

第一に、私は海外の医学部や薬学部、社会福祉学部の方々と交流しました。ベトナムの学生ははとて勉強熱心であり、母国語のベトナム語とは別に英語を流暢に話し、多くのことに積極的に取り組んでいたことです。日本に帰って気づいたことですが、自分の大学だけかもしれないませんが、講義に対して真摯に取り組まず、携帯をいじったり居眠りをしたりする学生が少なくないことです。日本は確かにベトナムに比べ全体としての教育水準は高いですが、個人レベルで見ると大きな差があり、彼らが日本人よりも意識レベルで先を行っているのではないかと感じるほど、学びたいして真摯でした。私は彼らを見習って現状に満足せず常に自分の未熟さを意識し続けねばと感じました。



2017.8.24 ダラットの湖畔

第二に、見知らぬ人と間に心の距離を感じにくく、ベトナムの方々はいつも陽気に笑い、彼らにとって異邦人である我々に気さくに話しかけてくれました。日本人

はなにかと他者と一定の距離か壁を作り、物怖じしてしまう性質であるが、ベトナムの方々は他人とすぐに打ち解け、すぐに新しいコミュニティが生まれていると感じました。彼らを見習い自分も気軽に人と打ち解けるスキルを身につけたいです。



2017.8.26 集合写真 (参加修了証とともに)

参加者が思い思いにたくさんのことを学び、体験しました。

## 4) 後記

今回の通信は、今夏のプログラム参加者全員が、加藤正寛学生編集長のもと、授業やテストの合間を縫って協力作成し、生の声を届けてくれました。「現地へ行って初めてわかること」を実感し、「将来も何らかの形で国際協力に携わる」という思いを共有しています。少しでも多くの若者がプログラムに参加し、国際協力への第一歩を踏み出せるように、サポートしていきたいと思ひます。(理事 新田香織)

e-mail : [snittaskmj0715@yahoo.co.jp](mailto:snittaskmj0715@yahoo.co.jp)

HP : <http://aiyugo.org/> (改定中)

振込先 : 特定非営利活動法人アイユゴー 理事長 新田幸夫

・三井住友銀行 阿倍野支店 : 7,479,470

・ゆうちょ銀行 : 00930-9-144252

編集責任者 : 加藤正寛 発行者 : 新田幸夫

